

論文要旨

e-textの文体論

D1125002

内山 和也

I. 論文題目

e-textの文体論

II. 論文構成

序論

- 0 . 1 研究目的
- 0 . 2 文体論に関する先行研究
- 0 . 3 研究方法と対象

1章 . 隠喩と換喩 ~ 表現主体の問題を中心に

- 1 . 1 文体論における隠喩と換喩
- 1 . 2 文体の分類における換喩の機能 ~ 計量文体学 について
- 1 . 3 表記における暗喩の機能 ~ カタカナ表記語 の機能について
- 1 . 4 文章における換喩の機能 ~ 冒頭 について

2章 . 文字と書体 ~ 書体の問題を中心に

- 2 . 1 文体論における 期待 と 情報
- 2 . 2 文字と電子文字との関係 ~ 肉筆 としての電子文字
- 2 . 3 文体と書体との関係 ~ スタイル としての書体について
- 2 . 4 文体と物語との関係 ~ 表現 としてのデジタル・フォント

3章 . 文脈と表記 ~ メディアの問題を中心に

- 3 . 1 第二の言文一致と第二の欧文脈
- 3 . 2 現代口語体における言と文
- 3 . 3 句読点と表記符号の用法について
- 3 . 4 振り仮名と宛字とについて
- 3 . 5 文体における修正と引用とについて

4章 . 修辞学と文体論 ~ 身体と行動の問題を中心に

- 4 . 1 文体・表現・修辞
- 4 . 2 言語とスクリーン ~ 児童文学に見る色彩語
- 4 . 3 電子空間の言語的ふるまい ~ ブログを手がかりに

結論

III. 論文概要

序論

本論は、現在の具体的な言語的状況を踏まえたうえで、 文体 がどのような問題として現われているのかを明らかにしようとするものである。文体論が領域横断的性格を有するものであるかぎり、文体はコミュニケーションの問題として考えるべきものであり、そのためにはまず文体を表現との関わりにおいて捉えるべきである（序論 1 節）。われわれ

は世界を表現するために記号を用い、コミュニケーションとは受け手の行動変容を意図した表現のことである（序論3節1項）。

1章

隠喩は、文字通りの文を用いることで聞き手にさまざまな解釈を引き起こすように意図するコミュニケーションの手段である（1章1節）。コンピュータとユーザとをコントロールするコンピュータのインタフェースは隠喩的性質によって構築されており、e-textもテキスト（の概念）を文字通りに実現するものである。このような性質に整合的でない「片仮名表記語」は漢字・平仮名に回帰してゆく予測される（1章3節）。

隠喩としばしば対になってとりあげられるものに換喩があるが、換喩とは現実世界での全体-部分の関係に基づいた記号の用法である（1章1節）。換喩について考えることも文体論にとって重要な議論となる。文体論には、表層テキストの要因をもとにテキストの個別性・類型性をとりだす手続きによって、文体をひとまとまりのテキストの換喩と捉える立場がある。この立場では、文体をテキストの個別性をとりだす手続きと同一視することになるため「操作主義的文体観」ということができる。その代表的な方法論にスタイルの数理的研究（計量文体学）があるが、具体的な研究においては、修辞学などの階層的な分類にかわるテキストの相対的分類の原理となりうるものと評価できる。また、ひとまとまりのテキストが与えられたときには原著者推定の便法ともなりうるものである。しかし、操作主義的文体観には所与の単位を必要とする偏りがあるため、e-textには適用しがたい面があるように思われる（1章2節）。また、換喩の概念を用いた分析からは、「冒頭」と「書きだし」との関係を見直すべきであると思われる。一般に、両者を概念の上で区別することは有効である。しかし、その自然な連関は物語図式の換喩によって構成されているといえるものであり、テキストの持つコミュニケーション機能から考えるときには、両者の関係が従来説とはむしろ逆に捉えられるものとなる。このことはe-textにおいて最も明示的であり、冒頭の研究や理解には紙のテキストの常識にとらわれない視点が必要になると思われる（1章4節）。隠喩や換喩およびそれらの概念を適用した考察から、言語表現をコミュニケーション行動や情報通信のテクノロジーにおいて捉える必要性が理解される。

2章

表現には、言語のように人間的なものだけでなく身振りのように動物的なものから電子コミュニケーションのように機械的なものまでがあるのであるから、表現の研究にコミュニケーション行動や情報通信のテクノロジーに関する視点を持たないことはそもそも一面的なのである。表現の研究が人間の学であることを標榜するあまり、人間中心主義に陥ってしまってはならない（序論2節1項）。また、文体論は、ことばをわれわれの外部に実在するモノと見做すことに基づくものといえる（序論2節2項）。ことばをモノと見るためには「書く」ことが必要である。なんとなれば、書き-読むことこそが対象との距離をうみだすからである。スタイルという語の語源も、文字を書きつける身体の軌跡が文体意識の基盤であることを示唆している。また、文体がスタイルであるように書体もスタイルで

ある。書体は、文体に比べてより物質的なイメージとより身体的なイメージとがあることから周辺的な問題と見做されがちである。しかし、このことは、書体がテキスト-化と書籍-化の両面に関わることを示している。書体の問題を考えるときには、電子文字（デジタルフォント）に関する考察が役に立つ。文字には「肉筆性」と呼ぶべき性質がある。これは、紙を指先で触れることのできる書字空間と見做すときに文字が持つところの性質であるが、そう見做すための視点には、人間が文字の本質的担い手であるという視点と通底するところがある。その意味では、電子文字に文字分解などの肉筆性を代行する手段・表現法があると考えることができる。その代用の機能するところでは、電子文字はすでにわれわれの肉筆なのである。しかし、電子文字が従来の意味での肉筆から最も後退しているのは、そのままでは商品価値に欠けるという点である。電子文字はスクリーン上の光のドットでしかないからである（2章2節）。電子文字の商品価値という点については、電子文字の蒐集行為に注目すべきである。蒐集の対象は必ず何らかのモノであるから、電子文字は蒐集の欲望を充たすべく商品価値を生みださなければならないわけである。その具体的な手段に関しては、データベースおよびリストという表現形式（様式）の関与が指摘できる（2章4節）。これらのことから知られるように、文体論がことばをモノとしてみる視点に基盤を置いていると考えるときには、議論を具体化するという点でICT（情報通信技術）をこそ議論の起点とすべきなのである（序論2節3項）。

また、書体は特定の「情報理論的文体観」で文体論上の難問となることがある。情報理論的文体観とは、文体を情報量の問題と見る視点を指す。情報理論的文体観はさまざまな立場から表明されうるもので、古今の定義を包摂する包括的な議論である（2章1節）。そのうち、文体を「投影された個性」「浮き彫りにされた意味」などに見做す立場は、書体の研究に際して適切でない。テキストの実現が書体を伴うからには、文体は書体に発するもの（投影された個性）か書体を通じて知られるもの（浮き彫りにされた意味）となる。そのときに、書体は目的である文体に対する手段であり、その点で文体論そのものと同型なのである。したがって、文体論が書体を問うときには、メディアとインタフェイスとを分離する必要がある。そのためには、書体がモノとして「書かれる＝読みうる」瞬間でなく、モノと見做される読みの瞬間を問題にしなければならない。そのことを可能にする文体論のモデルが必要になるのである（2章3節）。

3章

表現は「見えるようにすること」であり、表現されたものは「見えるもの」である。表現は、全面的可視化の要求によってテキストを目指し、テキストではすべてが表面になる（序論3節2項）。その表現のすがたに対するGTYPEが文体であり、文体論とは表現を解体してGTYPEの記述を試みるものであることになる（序論3節3項）。その好適な素材はe-textである。なんとなれば、e-textこそがテキストの実体であり、且つテキストをつくりあげる手続きでもあるからである（序論3節4項）。e-textの基本的な性質は、それが文字を伝達するものであり、文字をベースとして多言語的であることである。e-textがハイパーリンクによって本質的に多言語性を内包し、機械翻訳などの支援ツール

によって実際に多言語的であることは「第二の欧文脈」と呼ぶことができる。また、e-textは文字をベースにしつつも既存の書きことばとも異なるものである。それは、話しことばと書きことばとの境界を曖昧にする一方で話しことばそのものを書きことばにとりこませるのである。これは「第二の言文一致」と呼びうる現象で、そのときに話しことばを（simulateでなく）emulateした書きことばは「現代口語体」と呼ぶべきものである（3章1節）。現代口語体は、現在の電子コミュニケーションに一般的に見られる表現であり、さまざまな特徴が見られる。それらは、言語の枠組みで紙のテキストを対象にしたかぎりでは捉えられにくいものと思われ、電子メディアと電子コミュニケーションとの一般化は言語や表現をとらえる視点に変更を要請すると考えられる（3章2節）。話しことばと書きことばとの関係を考えるときには、句読点や振り仮名について考えることが役立つと思われる。句読点は、読むことあるいは書くことの線的で時間的な進行に対して一定のリズムないし秩序をあたえる空間的な要素と考えられてきた。本論では、句読点の用法を対象にした数量的な調査によって、e-textがコミュニケーション行動様式を変更するときに書きことばのスタイルに変化の生じる可能性があることを明らかにした。また、表記符号は概念的意味を持たないために周辺的要素と見做されてきたが、電子コミュニケーションでは文字と表記符号との境界は曖昧化している。表記符号の考察から明らかにされたコミュニケーションツールの変化による表現の変化は、文字をメディアとしてとらえるように求めるものである。紙のテキストにおいてもe-textにおいても、その基盤を提供しているものは文字なのであり、文字の性質に注目することなしにテキストを捉えることはできないのである（3章3節）。文字のメディアとしての性質は、振り仮名を対象にすることでよりよく知ることができる。振り仮名は、日本語の表記体系の重要な要素であるが、テキストの相互参照を可能にしたり・複数のものを結びつける機能などのあることが指摘できる。振り仮名は、その機能をe-textでのハイパーリンクに進化させる一方、その表記は紙の上で有効であり続けるものと考えられる（3章4節）。ここで、ハイパーリンクは、「読み」においてテキストを生成する手続きのひとつと見ることができるが、同じ手続きを問題にするときには、テキストの物理的な基盤について考えるべきである。テキストの物理的支えは、テキストの参加者が等しく利用可能なのではないからである。その点で注目されるのが消しゴムをはじめとする「テキストの修正装置」である。それらは、メディア形態にかかわらず、表現に全体性と統一性とを与えてテキストの生成に関わるものなのである（3章5節）。

4章

テキストは、読みにおいて全体性と統一性とを整えるものであるが、文体論や表現の研究は、しばしば全体性と統一性とを備えた所与の単位を前提とすることがある。それは「文章」などと呼ばれ、主に「表現主体」との関わりにおいて説明される。しかし、「文章」という所与の単位を想定するのは理論上の難点となる。例えば、今井文男『表現学仮説』は、そのような不適切なモデルを用いて「表現主体」を中心化したために、言語のメディアとしての側面を見落している。書き手の主体的で実体的な存在を暗黙の前提とする理論

は見直されるべきものであり、少なくとも「読み手」「e-text」という概念が採用されるべきである。したがって、表現の研究にはメディアと身体との関係表現の問題としてどのように考えるべきかという課題が生じることになる。また、現在の言語的状況においてその関係を考えるときには、工学と技術とにもしかるべく配慮しなければならないだろう。例えば、感覚の表現という点からメディアと身体との関係を考察するとき、既存の身体には情報通信技術の進歩と両立しない部分があること、われわれの身体がネットワークに接続されたハイブリッドなものになってゆくことが指摘できる。そのようなハイブリッドな身体領域では、スクリーンの性質（スクリーンはわれわれの表現の多くが実現する場である）やネットワークでの表現様式（われわれの身体はネットワークに接続されている）などのテキストのインタフェースに関することがら文体論の課題になって現われてくるだろうと予測される（4章1節）。

スクリーンの問題は、色彩語の象徴性との関係において考察しうる。ここでは、スクリーンの電光的性質によって、色彩語の表現性（視覚的象徴）は機能しがたいものになるであろう。紙のテキストでは、モノクロの印字が背後にイメージされる色彩に対する余剰といえるのに対し、スクリーンによる電光メディアでは、色彩がモノクロのスクリーンに対する余剰となるからである（4章2節）。また、ネットワーク上の表現様式についてはブログが好適な対象である。ここでは、電子空間における言語行動が、さまざまな二項的性質の両極の併存によって特徴づけられることが指摘できる。また、対面性を志向する文字ベースのメディアであることを基本とする環境にあって、ブログは時間によって構造化されているところがあり、よりよく話しことばを包摂した書きことばといえるものである（4章3節）。

結論

本論で提案した文体論の理論は、表現とのかかわりにおいて文体のありかたを説明するものであるとともに、それをコミュニケーションにおいて理解するためのものである。確実な電子化が進行する中において、文体あるいは表現の現状をとらえるためには、少なくとも本論で示したモデルが有効であろう。また、それは、種々の学問領域に架橋する学際的な領域として、ひろく文体論の考えを展開してゆくことにも役立つはずである。

以上が本論文の成果であるが、残された課題もある。最も大きな問題は、オンラインリソースを学術的にとり扱う方法論がほとんど確立されていないということである。この点について、指宿（2000）は「オンラインの時代に、学術資源がオフラインにおいてのみ存在するというのではネットの真価は発揮しえない。オンラインにおける知的営為を可能とする枠組みを構築していく作業が、学術共同体全体に突きつけられていると言えるだろう」と指摘している。また、英文論文のMLA方式では、本文内の引証に発表年の記載を求めている。文科系の研究で学術資料の有効期間は非常に長いという理由である。しかし、ICTに関係する研究の耐用年数はかなり短いようにも思われる。現状を肯定あるいは否定するだけでなく、本論の議論をより高いものに発展させようとする過程において、これらの難題と積極的に向きあってゆくことが今後の課題となるだろう。

引用文献（本要旨内）

指宿信（2000）「ネット文献の引用方法について 学術資源としてのネットの可能性」
[online] www.ne.jp/asahi/coffee/house/ARG/compass-028.html

IV.主要参考文献

魚返善雄（1963）『言語と文体』紀伊国屋書店.

木坂基（1976）『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房.

——（1976b）「近代文章の成立について」,『表現研究』23, p.1-8.

——（1992）「日本語表現法 日本語表現法研究の構想」,奥田邦男編『日本語教育学』
（教職科学講座第25巻）pp.88-102, 福村出版.

木坂基先生退官記念論文集編集委員会編（1999）『日本語表現法論攷』溪水社.

ギブソン,ジェームズ,J（1985）『生態学的視覚論：ヒトの知覚世界を探る』古崎敬 [ほか] 訳 [1979], サイエンス社.

ソシュール,フェルディナン・ド（1972）[1940]『一般言語学講義』小林英夫訳[1915],
岩波書店.

トドロフ,ツヴェタン（1987）『象徴の理論』及川馥, 一之瀬正興訳 [1977], 法政大学出版局.

ネルソン,テッド（1994）『リテラリーマシン：ハイパーテキスト原論』ハイテクノロ
ジー:コミュニケーションズ社訳 [1980, 1992], アスキー.

バルト,ロラン（1979）「文体とそのイメージ」沢崎浩平訳 [1966], 『現代思想』7
(4), pp.106-113, 青土社.

ペレルマン,カイク（1980）『説得の論理学：新しいレトリック』三輪正訳 [1977], 理想社.

ボルター,ジェイ・デイヴィッド（1994）『ライティングスペース：電子テキスト時代の
エクリチュール』黒崎政男, 下田政俊, 伊古田理訳 [1991], 産業図書.

マクルーハン,マーシャル（1987）『メディア論：人間の拡張の諸相』栗原裕, 河本仲聖訳
[1964], みすず書房.

ヤコブソン,ローマン（1973）『一般言語学』川本茂雄監修, みすず書房.

ランドウ,ジョージ・P.（1996）『ハイパーテキスト：活字とコンピュータが会うとき』
若島正 [ほか] 訳 [1992], ジャストシステム.

リファテール,ミカエル（1978）『文体論序説』福井芳男 [ほか] 訳 [1971], 朝日出版社.

Davidson, Donald. "What Metaphors Mean." Critical Inquiry 5 (1978):
31-47. Rpt. in Reference, truth, and reality: essays on the
philosophy of language. Ed. Mark Platts. London: Routledge &
Kegan Paul, 1980. 238-254.

Dawkins, Richard and John Krebs. "Animal signals: Information or

manipulation?" Behavioural Ecology: An Evolutionary Approach.
Eds. J. Krebs and N. Davies. Oxford: Blackwell Scientific,
1978. 282-309.

Langton, Christopher G. Ed. Artificial Life: the Proceedings of an
Interdisciplinary Workshop on the Synthesis and Simulation of
Living Systems held September, 1987, in Los Alamos, New Mexico.
Redwood City; Tokyo: Addison-Wesley P, 1989.

Ortny, Andrew. ed. Metaphor and Thought. 2nd ed. Cambridge, UK;
Cambridge UP, 1993.

Wales, Katie. ed. A dictionary of stylistics. 2nd ed. Harlow, UK ;
Pearson Education, 2001.

Williams, Bernard. Ethics and the Limits of Philosophy. Cambridge
Mas.: Harvard UP, 1985.

研究業績

【著書】

1. 『日本語表現法論攷』 溪水社
(共著・共著者：木坂基,尹鎬淑,安光裕子,古川俊雄,于康,黄其正,沼本克明,浅田健太郎,町博光,井上博文,友定賢治,江端義夫、担当：論文執筆「振り仮名の12の機能とその分化」pp.230-241・編集業務) A5・313頁 1999年.

【学術論文】

1. 終わりということ～会話における時間と虚構とについて～, 『広島大学日本語教育学科紀要』第8号, pp.85-90 (単著) 1998年.
[online] home.hiroshima-u.ac.jp/utiyamak/closing.html
2. 共感覚の文体～視覚的表現に関する日本語文体論の基礎的研究, 広島大学教育学研究科修士論文.(単著) A4・176頁 1999年.
3. e-textにおける句読点に関する一考察, 『表現研究』72号, pp.66-72 (単著) 2000年.
[online] home.hiroshima-u.ac.jp/utiyamak/kutoten.html
4. 文章はなぜ終わるのか～今井文男『表現学仮説』と"Rhetorogic"に関する一考察～, 『広島大学日本語教育学科紀要』第10号, pp.47-55 (単著) 2000年.
5. 電脳時代のカタカナ表記語のゆくえ メタファーと表現効果とをめぐって. 『広島大学教育学部紀要第2部』第48号, pp.257-266 (単著) 2000年.
(『日本語学論説資料』に再録, 『国文学年次別論文集』に再録)
[online] home.hiroshima-u.ac.jp/utiyamak/katakana.html [抄]
6. 「冒頭」再考 文章における始まりと終わりとをめぐって, 『広島大学教育学部紀要第2部』第49号, pp.189-196 (単著) 2001年.
(『国文学年次別論文集』に再録)
7. スタイルの計量に関する覚え書き～文体論の視点から～, 『計量国語学』23(7), pp.347-357 (単著) 2002年.
[online] home.hiroshima-u.ac.jp/utiyamak/zippping.html
8. 書体と文体, 『広島大学大学院教育学研究科紀要第2部』第50号, pp.225-234 (単著) 2002年.
9. 現代口語体の表現スタイルについて, 『広島大学日本語教育研究』第12号, pp.83-90 (単著) 2002年.
[online] home.hiroshima-u.ac.jp/utiyamak/kougo.html
10. 隠喩が意味を失うとき, 『広島大学日本語教育研究』第12号, pp.75-82 (共著・共著者：杉本巧、担当：論文執筆) 2002年.
[online] home.hiroshima-u.ac.jp/utiyamak/metap.html [ハイパテキスト版 2003.]
11. 振り仮名表現の諸相, 『広島大学大学院教育学研究科紀要第2部』第51号, pp.301-310 (単著) 2003年.
[online] home.hiroshima-u.ac.jp/utiyamak/ruby.html
12. 消しゴムについての文体論的ノート, 『広島大学日本語教育研究』第13号, pp.53-58 (単著) 2003年.
[online] home.hiroshima-u.ac.jp/utiyamak/eraser.html
13. 日本語教科書と国語教科書との語彙比較, 広島大学リサーチオフィス研究プロジェクト報告書.
(共著・共著者：町博光,徐洪、担当：データ処理・語彙表作成・論文執筆) 2003年.

【口頭発表】

- 1 . 三島由紀夫の「文体」研究 , 表現学会 1998年 .
- 2 . 色彩語の表現構造について . 日本文体論学会 1999年 .
[online] home.hiroshima-u.ac.jp/utiyamak/shikisai.html
- 3 . ブログの表現スタイルについて , 表現学会 2003年 .
[online] home.hiroshima-u.ac.jp/utiyamak/shiryo.pdf

【学会活動】

表現学会
計量国語学会
日本文体論学会